

舞—HIME 宿命の紅星

スーパーくるみ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

それは運命に振り回される少女達の恋物語

大切な者のため……

恋する者のため……

愛する者のため……

自分の命よりいとおいしい者のため……

少女達は戦い合う……

互いの『大切な』誰かの命を守るため……

例えそれが友であろうと……

初投稿です。

アニメ版とゲーム版のクロス作品になります。

つたない文章ですがよければ読んでください。

オリジナル展開。

主人公はゲーム版の高村恭司になりますが、年齢はヒロイン達と同じ高校生でいきます。

目次

プロローグ	1
新しい我が家へ	9

プロローグ

世間はゴールデンウィーク。

旅行や娯楽施設などで羽を伸ばしているなか、自分は山の中に続く長い坂を上っていた。

まだ春の涼しい風が吹きはするが、流石にこの道のりを歩けば汗もしたたる。

回りを見渡すと道路の両脇に広がる街路樹の桜はほぼ散り落ち、葉桜になってている。

見慣れない道のりを手に持ったスマートフォンを見ながら進んで行く。

長く続くこの坂道をこれから毎日のぼるとなると少し憂鬱になりそうだ。

学園の資料にはバスがあることが書いてあったからこれからはバスを使うことにしよう。

そんな事を考えているうちに目的の場所が見えてきた。

「あれが風華学園か」

坂の上には今まで見てきた風景とはまるで違っていた。

山の中腹に広がる広大な敷地。

その敷地内に歴史を感じさせる校舎と近代的な校舎をガラス張り構造物を挟むようにたてられている。

あれは教会だろうか

他にもテニスコートに実技棟。

学校案内にはバラの庭園もあると書いてあった。

自分が通っていた高校とは規模から違う

これが自分が通うことになる学園

とりあえず理事長に挨拶をするために約束した理事長室に向かうことにした。

「今の時間は……げっ!!約束の時間過ぎてる!!」

時間を確認するためにスマートフォンに目線を移した。

その瞬間、自分の頭上から声が聞こえてきた。

「ちよつとーどいてどいてー!!」

「はあ?」

顔をあげるとそこには一人の女の子がいた。

だが、彼女は止まる様子もなく自分のほうにむかってきた。

あまりのことで咄嗟に反応することもできず、女の子は真つ正面から突進してきた。

ぶつかつた反動で自分は後ろへ倒れ、ぶつかつてきた女の子は足がもつれたようで、止まることは出来たがそのまま体の上に倒れてきた。

「!危ない!!」

自分の上に倒れてくる彼女に反射的に手を伸ばし、何とか彼女を受け止めた。

「大丈夫……」

体から血の気が引いていく

「あ……」

逆に彼女は自分がどういう状況か気がついたようで、顔が紅くなつていった

理由は単純。

自分の左手が生温かく柔らかいものを掴んでいる……

受け止めた時の場所が悪かつた……

右手をスマートフォンが塞いでいたため、とつさに左手に伸ばした

ため、彼女を受け止めることは出来たが……

結果、彼女の胸を思い切り掴んでいた……

「い……」

彼女は直ぐに起き上がると口から一言、言葉を漏らし恭司から離れて体を震わせながら右手を強く握り閉めていく……

次に何が起こるかなど見るに明らかだ

「一端落ち着こう!!な!!」

「いやあああ〜!!」

悲鳴をあげながら彼女がノーモーションで放たれた右ストレート

は顔の右側にクリーンヒットした。

「アガアッ!!」

目に閃光がはしり、彼女に倒れこんだが、彼女は直ぐに払い落とし、自分を道路に置き去りにしたまま、何処かへ走り去っていった…

道路に置き去りにされた……

意識はあるが体が言うことを聞かない……

今日は日曜日。

回りには誰もいない……

ここで死ぬのか……

「あのくもしかして高村恭司さんでしょうか？」

不意に頭上から現れた女性の顔

ピンクの髪にカチューシャをした女性

メイドさん？

何で道路にメイドさん？

なんで自分の名前を？

学園の関係者？

色々な思考が頭の中を駆け巡ったがこの状況で自分の口から出た言葉は……

「すみません……助けてください……」

「かしこまりました」

道路に置き去りにされた男子が不意に現れたメイドに助けられた。

……何故メイドさん？

メイドさんは理事長の身の回りのお世話をしている人物らしい。

恭司の到着が予定より遅いため体の不自由な理事長に変わり、彼女が恭司を向かえに来たらしい。

彼女に連れられて、恭司は目的地の理事長室の前までたどり着くことが出来た。

扉の前で深呼吸をしてから恭司は理事長室の扉を叩いた

「失礼します」

理事長室に入るとそこには車椅子に乗る一人の少女がいた。

白い髪が印象的な自分より幼い少女

学園のホームページに載っていた少女だ。

冗談かと思っていたが、実際に見て冗談では無いことを理解した。

この風華学園の理事長。風花真白本人だ

「貴方が高村恭司さんですね。お顔が少し赤いような……」

「そこは触れないで下さい……」

言いたくても言えない……

恥ずかしくて言えない……

『名前も知らない女の子の胸を揉み殴られました』

恥ずかしさもあるが普通に警察沙汰。

自ら停学になりたいほど学校生活がきらいな人間ではない。

当然黙秘する

「貴方がよろしいのでしたら……」

と言いはするが気になって仕方がないようだ。

無理もない。

なんとなくだが分かる

恐らく腫れている。かなり腫れている

風が吹いて痛みを感じるくらいなんだから

骨にヒビでもはいってるんじゃないか？と思うほどだ。

見るに見かねて真白の車イスを押していたメイドが部屋を出ていくと数分もしないうちに冷えたタオルを持ってきてくれた。

タオルを顔に当てながら恭司はメイドさんに促され、理事長室の中央に置かれた来賓用のソファーに腰掛けた。

自分の向かいに車椅子に乗った真白が来たとき、恭司はどうしても聞きたかった事を聞いた

「事前に事情は説明しましたが本当に良いんですか？」

自分で言うのもなんだが彼女が僕を学園に迎え入れるのには何のメリットも存在しない。

自分が仕出かした事を考えればむしろマイナスに成りかねない。

事前に調べたがこの学園の歴史はかなりの物だ

元々が格式高いお嬢様学校。

今は共学になっているもののかつての名残と言うべきか、この学園の生徒には政治家や上流階級のお嬢様が数多く在籍している

地元外でも進学校としても名を馳せているほどの学園だ。

正直、今の自分にはあまり相応しい学園ではない

「電話でも申し上げましたとおり、わが校は貴方のお母様に生前お世話になりました。それを鑑みれば転校の手続き位お安いものですよ」

「はあ……」

そう言われても簡単には飲み込めない

そもそも母が何をしたのか全く知らないのだから

母は学者だったが自分が幼いとき一緒に乗った車が事故に遭い、死んでしまった……

自分は奇跡的に無傷で助かった

だから、母の仕事が世間にどんな影響を与えたのか、そもそも与えられたのかすら知らない

だから、いくら恩返しといわれても素直には受け取れなかった。

そんな自分を気に止めることもなく、真白は淡々と話続けた

「それに事前に受けてもらったテストの結果から考えてみても貴方の転校を拒む理由はありません」

そう言つて真白はこちらに向けて満面の笑みを浮かべた

自分より幼いはずの真白が放つ年不相応の雰囲気。恭司は何も言えなくなつてしまった。

まるで操られているように書類にサインをしていた。

さすがこの年齢で学園の理事長をしている天才少女。

これが彼女の人身掌握術なのだろう。

恭司がサインした書類を側にいたメイドに渡したとき、不意に真白から意外な質問が飛んできた

「ところで、貴方はお母様の研究については何かご存知ですか？」

「母の研究ですか？すみません……僕も考古学や歴史学の学者というくらいで詳しくは知りません。研究資料も事故の時に全部……」

今でも鮮明に思い出せる事故の光景……

燃え盛る車……焼けるタイヤの悪臭……

何故、自分だけ……

どす黒い記憶が頭の中を支配しかけたとき、恭司の嗅覚が甘い香りを感じた。

目の前には一つのティーカップが置かれていた。

「お茶はいかがですか？気持ちが悪く落ち着くと思いますよ」

「ありがとうございます」

メイドさんが入れてくれたようだ。

中のミルクティーの水面に自分の顔が写った時、今、自分がどんな酷い顔をしていたかはじめて気がついた

口をつけるとミルクティーの香りと甘味が体に染み渡るのを感じた。

メイドさんが言ったように自分の中にあつた黒い感情が薄れていき、穏やかな気分になった。

「気分を悪くしてしまいましたね……もうこの話はおしまいにして学園生活について話しましょう」

そのあとは真白が言った通り、学園生活での注意事項や学園の校則、学費についてなど恭司の生活についての話だけで恭司の母の話は全く出なかった

ひとしきりの説明が終わり、引越しの荷物の整理もあるため今日はこのぐらいにしておくことになった。

理事長室の扉を開ける前に、恭司はどうしても言いたい事を言うために、扉の前で真白の方に振り向いた

「あのー今回は本当にありがとうございます!!」

そう言つて恭司は部屋を後にした

彼が学園から出ていくのをこの学園の主である真白は彼が今までいた理事長室のテラスからメイドと共に見ていた

彼の姿が見えなくなつた時、車椅子を押しているメイドが口を開いた

「真白様……彼が例の……」

「ええ……」

「本当に切り札になるのですか?」

「それは分かりません……ですが彼の存在は今回の『祭』に大きな影響を与えると私は考えています」

そう願いながら真白は彼が見えなくなつた門を見続けていた。

学園から少し歩いた所にバス停があつた

時刻表を見るとバスは当分来ないようだ。

バス停のベンチに腰を降ろすと空を見上げ、目を奪われた空にはさんさんと太陽が輝いていた

だが、彼が目を奪われていたのは太陽ではない……

太陽の側で一際は輝く1つの星……

日中にも関わらずまるで当たり前のように……

その星は紅く輝きを放つていた……

何故か自分しか見えない紅く輝く星……

「今日も一段と紅くて綺麗だな……」

何故、自分にしか見えないのかは分からない……

生前、母にこの事を話したら、何故か母の顔から血の気が引いていくのを見た時、普通ではない事に気が付いた。以後、この事は誰にも話していない……

だが、見えないものが見えるのには何か理由がある筈だとはなんとなく感じている……

その『理由』を理解する事に成ることを感じながら……

新しい我が家へ

「……おかしい」

先程からずっとバスを待っているがいつこうに来ない
予定表の時刻は過ぎている

もう一度時間を確認するために時刻表をみると……

「あつー今日は運行してないのか!」

時刻表の下に小さく

『5月3日～5月5日の間。運行休止』

と書かれていた

考えてみたら当たり前か

この学園には学生寮がある

夏休みならともかくゴールデンウィークのような連休中に家に帰
る学生は限られるだろうし、坂の下にもバス停があった

わざわざ坂の上のバス停を使う市民もいないだろう

「……徒歩で行くしかないか」

まあ、坂のしたまでだし、登りよりは楽か

「残念だったね」

「え?」

自分の後ろから急に声を掛けられた

振り返るとそこには一人の男の子がたっていた。

白髪に赤い瞳。

服装から学園の中等部の生徒だろう。

「見ない顔だね。名前は?」

年上にタメ口。

しかも人をなめ腐ったような態度。

「馴れ馴れしいヤツだな。お前」

そう言っつて恭司は目の前の後輩を睨み付けた。

年下に対し大人げない気はするが、コイツからは関わってはいけな
い匂いがぶんぶんする

だが、平然と目の前の後輩は喋りかけてきた。

「僕は風。炎風。見ての通り唯の学生さ……そう……唯のね」
普通のヤツは『唯の学生』何て言わない
もしかして……中二病？

「高村恭司。休み明けからこの学生だ。」

一応自己紹介はした。

触らぬ神にナンとやらだ。

恭司は風に背を向け、スマートフォンに視線を落とした
あからさまに関わらない事を風に行動で見せつけた。
しかし、風は口を閉ざすことはなかった。

「ここはいい学園だよ。可愛い子も沢山いるし、面白いことも沢山始まるからね」

中二病と言うよりナチュラルに空気の読めないやつらしいが……

先程からの上からの態度……

年上に対する礼儀の無さ……

いくら空気の読めないヤツであっても流石に頭にきた。

「だから！ 馴れ馴れしいって……」

一言文句を言ってやろうと勢い良く振り向いたがそこには誰もいない……

少し前まで声がしていたはずなのに……

振り向いたら風は居なくなっていた

「どこ行った……!!」

あまりの怒りで叫んではみたが、叫び声は自分以外誰もいない坂道に木霊するだけ……

「……行くか」

あんなヤツの事は忘れよう。

意識を切り替え、先程までの可愛そうな自分とはお別れし、唯、目的地に付くことだけに意識を向け、坂道を下っていった。

「この辺は変わらないな」

学園から徒歩で来たためすでに空は青から橙色に移り変わっていた。

時間はかかったがやつと自分の知る景色に変わり、不思議と足取りも軽くなる。

学園周辺には土地勘はないが、少しはなれたこの住宅地は別だ。

自分が幼いとき、母とよくこの辺に遊びに来ていた

理由は目の前にある一軒家だ

「この家も久しぶりだ」

これから住むところが見つかるまでの仮住まい。

幼なじみの実家。天河宅だ。

最後に来たのは小学生くらいだった気がする

久しぶりに会う幼なじみはどうなっているだろう……

そんな淡い期待も胸にチャイムを押しした

「はい。どちら様でしょうか？」

玄関に出てきたのは可愛らしいエプロンをした幼なじみ……ではなくエプロンが不釣り合いな強面の男だった

「……すみません家を間違えました」

どうやら家を間違えてしまったようだ。

今度はアプリで確認しよう

住所を入力し、案内をスタート

すると音声ガイドダンスが起動した

『目的地に到着しました。案内を終了します。』

歩かずに目的地に着いたようだ。

再び玄関に向かい強面の男と再度対峙した

「どちら様でしょうか？」

「あの……こちらは天河さんの家でお待ちがないでしょうか？」

「左様でございます。御用件は何でしょうか？」

あつてる……あつてるけど……

誰!?

前、来たときには居なかったよ!

俺の幼なじみはこんなにもエプロンが似合わない強面じゃなかったはずだよ!!

そもそも性別が違う!!!

自分の頭の中が完全にパニックだ。

強面の男が放つオーラに圧倒され、冷や汗が止まらない……

「お兄ちゃん?」

背後から聞こえる声に気が付き、振り向いた。

そこに立つ一人の少女には見覚えがあった……

「もしかして……朔夜か?」

少女は夕焼けが綺麗な空にピンクの髪をなびかせていた。

その光景にかつての面影をみた……

何時も父親にしがみつきながら、こちらを見ている少女……

だが今、目の前にいるのは年相応に成長し、恥ずかしながら胸が高鳴るってしてしまうほど綺麗になっている。

自分の幼なじみ。

天河朔夜がそこにいた。

「お兄ちゃん!」

朔夜はこちらに向かい走りだし、飛び付いてきた

急な事で驚いたが何とか朔夜を受け止めることができた。

「久しぶりだな。」

「あと、『お兄ちゃん』って呼ぶのは止めてくれないか。同じ一年生だろ」

「でもお兄ちゃんはお兄ちゃんだよ!」

朔夜は嬉しそうに言うと、自分の胸に顔を埋めた。

朔夜の温もりが伝わってくる

そんな状況に恥ずかしくなり直ぐに朔夜を引き剥がすと彼女は少し名残惜しそうな顔をした。

「朔夜様。彼が先生が話されていた方ですか?」

こちらの様子を伺っていた強面の男は朔夜に自分の事をたずねてきた

「そうだよ！サギー」

「サギー？」

そんな可愛い名前なの……

顔からして『ジョセフ』とか、『セバスチャン』の方がまだしっくりくる……

そんな事を考えているとサギーなる人物はこちらに手を向け、握手を求めてきた

「お初にお目にかけます。天河家の執事。嵯峨野孝也と申します。」

「初めまして。高村恭司です。」

恭司も手をだし、握手に応じた

『嵯峨野』で『サギー』ね……

何となく納得……

色々インパクトが強い人みたいだけど優しい人柄がしゃべり方から滲み出ている。

悪い人では無さそうで先程まで顔だけで判断していた自分を少し恥じた。

嵯峨野は挨拶を済ますと、直ぐに恭司を自分の部屋に案内をした。

朔夜の居間でパソコンを開いていた

どうやら先程の事を画面の向こう側の人物に説明しているようだ

「いや〜すまない。嵯峨野君に会うのは初めてだったな。混乱させてしまった」

「ご無沙汰しています。天河教授」

パソコンの画面に映し出されたのはテンガロンハットに無精髭をしたまるで冒険家の洋画に出てきそうな風貌をした男性。

彼こそがこの家の主であり、朔夜の父親。

天河諭である。

母の友人であり同時にライバルであった人だ

天真爛漫だった母とは一緒に研究をした時に馬があつたようでそ

れから家族ぐるみの付き合いになった。

仕事柄、母が研究で遠出するときよくこの天河宅にあずけられていた。

そのため、恭司にとって天河教授は父親のような存在だ

今回の転校もこの天河教授がいる街だからという所も大きな理由でもあった。

「そう言えば実家から電話があつたぞ」

「……何と言っていましたか？」

「……『自分の立場を理解するように』だそうだ」

「そうですか……」

挨拶程度の電話だろうが、自分に対しての伝言を残す辺りに相手の嫌らしさを感じ、怒りがわく……

事情を知っている朔夜は隣にいる恭司が放つ雰囲気が変わったのを感じた……

「天河先生にご迷惑はかけません。住むところも直ぐに見つけます」

「ははは！ 気にすることはないよ！ 君ならずつとこの家においても構わん！」

「そうだよ！ お兄ちゃんなら大歓迎だよ！ ね！ サギー」

「ええ。それは勿論」

「でも……若い男女が同じ家にいるのは……そのく」

いくら幼なじみとはいえ、前回会ったときより数年時が流れている正直、あの泣き虫でいつも天河教授にくっついていた時の朔夜とは

別物ではないかと思うくらいに綺麗になっていた。

自分だって年頃の男の子だ……

やましい気持ちも芽生えても不思議はない

「家には嵯峨野君がいるし、万が一の時は君が嫁に貰ってくれればいい！！」

「お父さん！！」

天河教授の発言に朔夜は顔を紅くして怒鳴ったが、当の本人はそんなことは何のその。

ははは！とまた高笑いをあげていた

「前向きに検討させてもらいます」

「私も研究で家を空けることが多いからな。よろしく頼むよ」

そう言って天河教授はテレビ電話のスイッチを切った

実際、天河教授の提案は願ってもないことだ

学生が住むところを探すのは一苦労だ

ソレをしなくていいと言うのは学生にとっては嬉しい限りだ。

だが、同時に迷惑をかけてしまうのではないかという考えも頭に浮

かぶ……

まあ、天河教授がああ言っていたわけだし、結論は直ぐにつけなくても大丈夫だろう。

お金の心配は無い、気長にいこう

そんな事を考えながらソファーに深く体を沈めた

そんな時、自分の足に違和感を覚えた。

足に生暖かいものを感じ足元に目をやると、そこには綺麗な毛並みをしあ小動物が自分の足にすり寄っていた

「みやあ〜」

「何だコイツ。猫？犬？」

見た目は子犬のような、子猫のような姿をしているが、本来、猫科や犬科の種類の動物に有るはずのない角が生えてる。

初めて見る謎の生物がそこにいた

「可愛いでしょう〜ツキヨミっていうの」

朔夜はツキヨミと呼ぶ生物を抱き抱え、柔らかそうな毛並みに頬を擦りよせた

「何て言う動物なんだ？」

「さあ？」

さあって……ソレくらいは調べろよ……

浅い考えに呆れはするがどんなものにも優しい所は朔夜の美点の1つだ。

それに、ツキヨミ自身が朔夜にとってもなついている様子を見る限りでは害のある生物ではないだろう

「よろしくな」

そう言つて、ツキヨミの頭を撫でた

頭を撫でられているツキヨミも気持ち良さそうに目を細めた

「みゃ〜！」

「ツキヨミもよろしくつて」

よくわからない生物にも歓迎され、恭司の新しい町で始まる新しい生活が始まった